



◇ 今回は、沖本裕司さん（大阪大学外国語学部ペルシア語専攻）のイラン留学記です！



初めに 関高校卒業生の沖本裕司です。私は2014年に高校を卒業し、現在は大阪大学外国語学部外国語学科ペルシア語専攻に所属しています。ペルシア語という言語を皆さんは聞いたことがありますか？ 知り合いの中にペルシア語を母語としている人はいますか？ おそらく多くの人にとってなじみのない言語を、私は専攻しています。そして、今年2017年、私はペルシア語を国語とする数少ない国であるイランに留学してきました。イラン以外にもいくつかの国を訪れましたが、今回はイラン留学に関して重点的にまとめます。

留学 私が留学を考え始めたのは大学3年生の春でした。その数か月前に私は大学の春休みにペルシア語専攻の友人と3週間イランを訪れていました。それ自体は2週間、イラン第二の都市イスファハンの大学で授業を受け、残りの1週間でイランの主要な観光地を周ったものでした。3週間だけでは得られるものは限られていましたので、1年間大学を休学してイランに留学しようと決意しました。

実際には4年生の春からフィリピンに3ヶ月、そしてその後イランに6か月留学する計画でした。フィリピンでは英語の語学学校に留学していました。それは、イランではイラン人以外の、同様にペルシア語を学びに来たアジアやヨーロッパの人々とは英語でコミュニケーションをとることになるだろうと考え、その時点で英語を話せなかったのだから勉強しなすためでした。フィリピンでの生活もとても刺激的で英語力以外にも多くのものを得ましたが、長くなりますので割愛します。

7月にイランの首都テヘランにわたり、テヘラン大学ペルシア語教育センターに入学しました。待ちに待った時でしたが、イランの生活は波瀾万丈でした。イランを語るうえで欠かせないのが、そこに住んでいる人々、すなわちイラン人の魅力でしょう。イランに旅行したことがある人の多くは「イラン人はとても親切だった」「とても世話好きで助けられた」と言うそうです。実際、私も以前訪れたときはその

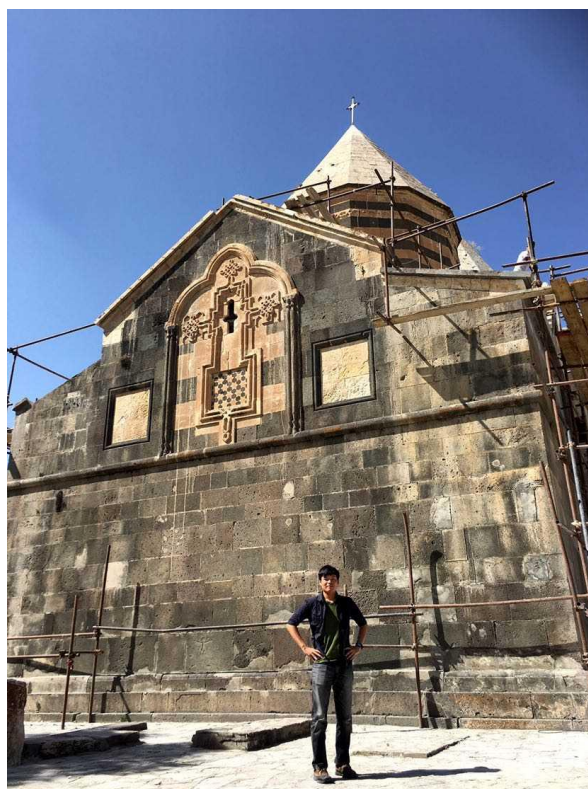
親切さに驚いたものでした。道に迷っているときには知らない男性が何人も集まってきて道を教えてくれたり、喫茶店でふと話をしただけでそのままホームパーティーに招待されたりすることがありました。こういった特性はほぼ全てのイラン人が持っていると思います。

しかし、それは旅行という短期間かつ表面的な付き合いであったからかも知れません。テヘランで生活してみて感じたことですが、イラン人の大多数はやはり親切な人です。しかし残念ながら、親切なふりをして外国人を騙す、もしくは見下す人もいます。何度も「ぼったくり」の被害にあい、留学初期は軽く「イラン人不信」のようなものになっていました。

「ペルシア帝国の末裔であるというプライドが彼らをこのような性格にするのだろうか」「多民族国家のマジョリティであることが原因か」などとルームメイトのフランス人や韓国人と議論することもありました。しかし、次第にそれがこの国の魅力のように感じ、通りで怪しい商売人に話しかけられてもそれをあしらうことに楽しみを感じるようになっていました。それは同時に、自分のペルシア語が向こうに通じるということでもあり、イラン人との会話は成長を感じる時間でもありました。

当然、私がかかわったすべての現地人がそのような人ではありません。放課後や休日はよくイラン人の友達と遊びに出かけていました。彼らの多くが日本や外国に興味を持っている人々です。イランにはお酒が存在しません。当然バーやクラブもありません。イランは国の法律がイスラームの戒律によって構成されているためです。また、同時に反米的な国家ですので、欧米的な娯楽も存在しません。そのため彼らとは公園でスポーツをしたり、喫茶店でおしゃべりをして時間を過ごしていました。イランの人々は紅茶、煙草そして詩が好きな人たちです。中東地域特有のシーシャという水煙草をくゆらせながら紅茶を飲み、詩を読んだりおしゃべりをする、というのがイラン人の代表的な休日の過ごし方でした。

学校が休みの時はテヘラン以外の場所に旅行もしました。冒頭紹介した写真は、世界史好きな学生にとってはおなじみ「イスファハンは世界の半分」という言葉で知られる、イスファハンのイマーム広場です。広大な土地に建てられたモスクとバザール、それらに囲まれた広場に立ったとき、こんな傑作を建てた人類の創造力に感動し、そしてその歴史の重みを感じて私は本当に言葉を失いました。



イランは本当に歴史が長い国です。数百年前に建てられたモスクや霊廟は街中にあります。また、イランというとイスラームのイメージを抱く方が多いと思いますが、当然ほかの宗教も存在します。前頁の黒っぽい建造物が西暦 60 年ごろに建てられたとされるアルメニア教会です。世界遺産にも認定されていて、トルコ国境近くの原野の中にひっそりと建っていました。



そして、右の写真がメディア王国の首都エクバタナの遺跡です。メディア王国ですので、およそ 2500 年前前ということになります。こういった世界史の資料集で見ていたような歴史的な遺産を自分の目で見ることは本当に貴重な経験でした。

また、イラン人が持っている日本のイメージが、私にとって興味深いものでした。通りを歩いていると大抵「中国人か!？」と声をかけられますが、「日本人だ」と答えると多くの方が興味を持ってくれます。そして、某日本車メーカーの名前や、ホンダやカガワといった有名なサッカー選手の名前が出てきます。また、ヒロシマやナガサキも有名です。このワードは、日本のことをよく知らないイラク人やシリア人の方々も知っていました。やはり被爆地は世界の共通認識であり、世界中の人々にとっての非核化の象徴なんだと実感しました。

イランという日本人にとってはなじみのない国での生活はとても刺激的で、有意義な日々を過ごしていましたが、4 か月弱滞在したのちにイランから出国することになりました。イランの後はオーストラリアに行き、1 か月ほど旅行して日本に帰国しました。

外国の人にとって日本の「察する」文化は理解することが難しいと言われてるように、時に、私も彼らの言動についていけないことがありました。また、イランは比較的親日国ではありますが、どうしても生活しているうちに立ちほだかる偏見や、偏見とまでいかなくても現地人と外国人の区別という壁に、ある種の居心地の悪さを感じたということもありました。しかしながら、やはり私はイランという国が好きです。日本では全く考えられないような出来事も多く、この経験は私にとって貴重な財産になりました。この国が私たちともっと身近な存在になればと思います。

伝えたいこと 私が「イランに留学する!」と言ったとき、多くの人に「危険じゃないの?」「治安は大丈夫?」と聞かれました。私がイランは安全だと説明しても、納得した表情をした人はわずかでした。実際、観光地としても人気なヨーロッパ各地で数か月に一度のペースでテロが起きていますが、イランではここ十数年で一件しかテロが起きていません。テロの回数が少なければ平和ということではありませんが、やはり大多数の日本人が「イスラーム=危険」「中東=紛争地域」と考えてしまっているからでしょう。イランでムスリムの人々と話していても、彼らの信じる宗教がいかにか平和的であるかを実感できます。そして、彼らは欧米のメディアはこぞってイランとイスラームを危険視していると嘆いていました。私たちが彼らに対してどういう印象を抱くかは自由ですが、曖昧な情報に踊らされてそういった

偏見を持つことは、ただの差別であるということを理解してほしいです。

特に、グローバル化が進む社会にこれから進出する高校生の人たちにとっては重要なことです。人から得た知識や情報で満足するのではなく「自分で考える」ことを徹底してほしいです。そして、それは何事にも通じることです。部活動でも受験勉強でも同じことが言えます。そして、皆さんが大学に入学すると、これまでと違って一気に選択肢が増えます。その一つに海外留学も含まれていますが、海外留学を勧める人が多い中で本当にそれが自分にとって重要がどうか、自分で考えなければいけません。私のように途中で断念することもあり得ますので。すなわち、自分で考えて、さらに様々な面で自立していくための準備期間として高校生活を送っていくことをおすすめします。



イランの名産品、
手織りのペルシア
絨毯



「アーシュラー」
というお祭り。預
言者ムハンマド
の孫フサインの
殉教を追悼する
行事